

～ノスリ2号のリハビリ～

○保護内容

保護日：2013年11月24日

場所：多賀町一ノ瀬周辺

原因：獣害防護用ネットに絡まっているところを発見・保護。目撃者の話によると7～10日前からネットにかかっていたとのこと。

保護時体重：不明

○受取

受取日：2013年12月14日

方法：直接

経過：保護された後、数週間の間、T博物館の学芸員により保護されていた。

引継事項：・グローブの上に乗せて食べさせるようにしていた。肉は精肉。

・段ボールの中で飼育。

・3回ほど放鳥を試みたが、10m飛ぶか飛ばないかぐらいで下りた後は、もう一度手で捕獲することができた。これ以上は不可能、また飼育が大変であることから引き渡す。

○引受時の詳細

体重：790-800g

試行飛行：一本なら20mぐらいは飛行できた。2本目からは10mも飛べない。

羽の状態：羽は尾羽のほぼすべてが途中で欠損。初列風切は一部楕状に開いている。

外傷：右脇に裂けた傷あり。院長により縫合。

治療時の体重：800g

竜骨の状態：尖っているように感じるが、筋肉の削瘦もあることから体重により判断。要観察。

レントゲン：左翼肘関節あたりに炎症あり。

外傷：右翼脇に大きな裂傷あり。

○リハビリ

放鳥：尾羽がすべて途中から欠損していること、またこれまでの保護期間が長く、筋力等が落ちていること、また試行飛行でも距離が飛べないことから渡りの期間中に放鳥は無理と判断。次の換羽および渡りを待って放鳥することとする。

体重：100%の体重を800gと設定し、最初は600g（75%）程度で調教。

フライト訓練：

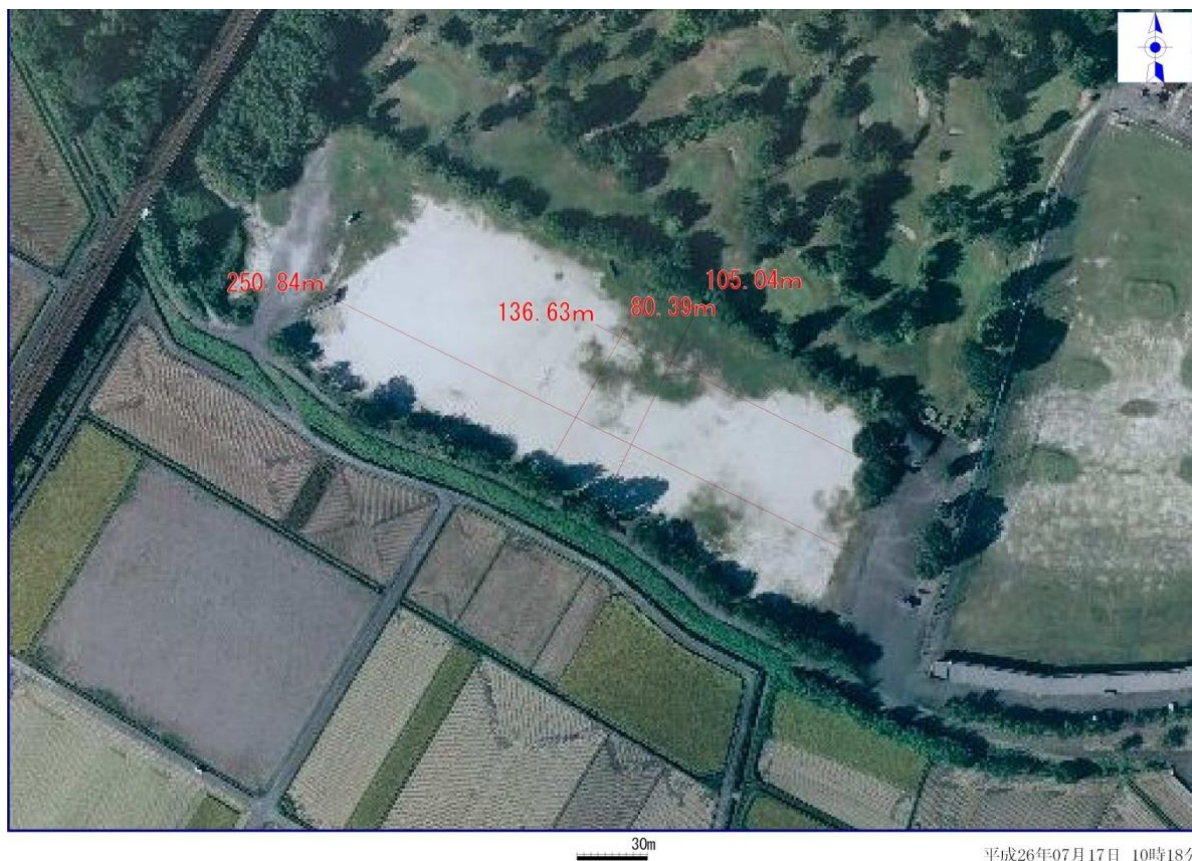
①クリアンスをつけて、クラブに呼ぶ。（20-30m）

②フリーにしていつもの場所（壁など止まれるところ）からクラブに呼ぶ。

③ルアーにより呼ぶ。（壁から）

→スイングしたルアーを正面に投げ、その高さを上げていく。身長近くまでは上がる。

- ④グラブスイングにより呼び、飛ぶと笛を吹きルアーを落とす。
→上がるための訓練だが、屋根または木に上ることを覚えたため再度ルアー強化
- ⑤グラウンドによりフリーフライト
→スイングしたルアーよりも、落とすルアーに対して反応が高い。
→元々、追撃型ではなく待ち伏せ型であるため、高く上げたルアーを取らせることは難しいか
- ⑥時間をかけたフリーフライト（30～60分）
→ノスリから遠めを選びながら歩き、距離を飛ばす。
→こちらに近づくため、またはこちらを見るためグラウンドを横断したり、木（高さ5-7m）の頂上に上がるようになる



○体重を上げているときの管理について

2014年8月18日

体重を増加させているときは、維持的にはばたつき逃げようとするものの、ノスリという種類の特徴か人が近くにいる環境に慣れてしまう傾向がある。

これでは放鳥時に飛ばない可能性があるか。

また、20mほどのフライトをさせてみると2～3本飛んだだけで開口呼吸をする。

フライト時の体重よりも体重が上がっている重さにもよると思うが、それ以上に体重を増やしている間に飛んでいないことが原因と考えられる。

換羽がある程度完了するとしっかりフライトをさせる必要があるかもしれない。

しかし、フリーフライトでない場合は、紐付のフライトになる。グラウンドをつかってもたると紐が小さい草にかかりとまってしまうことがある。ラジコンなど何か使用することはできないか。

8月20日

3日目のというだけでフライト後の息切れがなくなってきた。できることならば距離を伸ばしていきたい。

8月21日～

毎日もしくは2日に1回の割合で紐付のフライトを繰り返してきた。

25m～45mの紐付フライトを基本的には10本以上繰り返す。

ただし、紐を巻き直す時間が必要なことから1つのフライトと次のフライトの間は1～3分の間隔が空くものとする。

放鳥日までのフライトの回数が多くなるにつれ、フライト後の翼の位置の落ちや息切れも見せなくなってきた。

9月15日 発信機（12g：BWの1.5%）を装着後の初フライト

30～37m 20本ほどかそれ以上

45m 3本

これらのフライトを繰り返した後でも、最後のフライトでは屋根に上がろうとし、十分な飛翔力を見せる。

○ノスリ（本個体）の特徴

自己換羽：尾羽を試験的に抜いてみたが生えてこず。

フライト：・翼の幅が広いので、風をだんだんつかめるようになり、向かい風または横風にはフライトのうまさを見せるが、追い風は苦手な感じが見られる。

呼ぶときは風上から呼ぶと良い訓練になると思われる。

- ・カイトやバルーンによりフライトの高度を上げる方法もあるが、確実なルアーへの反応を見せる必要がある。しかし、距離がのびるとスイングされたルアーに対する反応が低くなる。これは、待ち伏せ型であるノスリの狩猟特徴のためと考えられる。よって、ルアーを高度の空中に設置するカイトやバルーンに対してどこまで反応を示すかは、訓練のすすめ方にもよるが現実的ではないように思う（特にこの個体には適していなかった）。ルアーをスイングではなくぶら下げるだけにし、確実に取らせることを覚えさせていくと結果が変わった可能性はあるが、絶対ではない。

空中探索型の狩りをすることもあとと記載されることがあるが、稀な狩り方法をトレーニングに使用することは難しい。おそらく、普段は、動くものを長距離から狙うのではなく、ある一定の確実な線を自分の中で引き、その範囲内の地上性生物を狙っているのではないか。

このことから、ノスリについては、確実なマニングと空腹感のコントロールにより、時間をかけ、自分から風により上がる瞬間を待つことが良いように思う。

行動：・食事中にカラスなどが上を通ると身をかがめエサを隠す。

- ルアーは直接取りにくる場合はあるが、グラウンドのサイドにある木を行き来するなど通りすぎて近い木にとまってから、とりにくる。この行動は待ち伏せ型の狩猟をすることと関係がある行動か。
- 9月16日にエサとして死亡したシマヘビを与えた。シマヘビを与えるときに、動かすとびっくりした行動を見せ、飛んで逃げるのではなくステップバックをした。その後、シマヘビを置いておくと、少し様子を見てから、警戒をしながらも即座に脚で掴みにいき、完食した。今までに生きた昆虫(カマリやキリ)を与えてみるも、興味を示すが掴みにいったりすることはなかったことから、今回の行動から、野生にいたころにヘビを食材としていたことがあると予想できる。

○羽の管理

ほぼすべての尾羽の欠損と、初列風切の羽先の摺れなどから、放鳥をするためには羽の生え換わりを待つ必要がある。しかし、この地でのノスリの換羽がいつされるのか分からない。一部羽が抜けるのを待ってから体重を上げ、換羽を促進させる方法も考えるが、体重を80%に保った状態で換羽が季節通りはじまるとは限らない。渡りの経由の季節(9月下旬から11月下旬)に放鳥をすることを考えると、その季節までに換羽が完了している必要がある。

猛禽の場合は春から夏前かけて小さな換羽、秋に本格的な換羽がされるとされるが、少なくとも夏までには一部の換羽が完了し、秋の換羽と合わせて放鳥の際にはほぼすべての羽が生え換わっている状態を狙いたい。

2か月の換羽期間を仮定すると少なくとも6月までには換羽が始めたい。

しかし、早くはじめた場合にも結局は季節が違い、換羽しないという可能性も考えられる。2か月の全くフライトできない期間はあまり望ましくないように思う。

判断基準は・・・

- 4月下旬から5月上旬ごろにハヤブサを管理している方からは徐々に餌の量をあげ換羽をさせていく旨の話あり。ただし、1年中飛ばすタイプの方ではなく、冬場のみ。
- 5月下旬から6月上旬にかけてハリスホークとブンチョウ(5月中旬から1羽、6月上旬からもう1羽)がかなり換羽し始めた。
- 筋力は大切ではあるが、まずは換羽を優先したい。
- エサを上げることで換羽を促す可能性はある。

以上のことから、2014年6月22日(日)からエサの量を上げることとする。

今までが約ヒヨコ2匹(約60g-70g)を与え、BW620g~630g(78~79%)前後をキープしていたが、ヒヨコ2匹~2匹半弱+マウス1匹を与えながら上げていく。

できるかぎりジャンプアップを繰り返し、筋力を使っていくようにする。

▼6月23日 エサなし

▼6月25日 BW662g 風切が1本抜けているのを発見

▼6月27日 BW673g 据えていても少し落ち着きが不安定に感じる

- ▼6月28日 BW702g
- ▼6月29日 エサなし
- ▼6月30日 BW650g
- ▼7月 1日 BW681g
- ▼7月 3日 BW718g 少しずつではあるが毎日羽が抜けている
- ▼7月 6日 エサなし 尾羽が一本抜けてる
- ▼7月 7日 BW685g 前日のエサなしから基礎体重が上がっていることがわかる。
- ▼7月10日 BW728g 尾羽もはえてきている。汚みがあるので70トラップをする。
- ▼7月14日 エサなし
- ▼7月15日 BW699g 650→685→699 と順調に増量
- ▼7月18日 尾羽が抜けている（3本目）
- ▼7月19日 BW758g
- ▼7月20日 エサなし
- ▼7月21日 BW719g 糞の中から寄生虫を発見
- ▼7月22日 BW756g
- ▼7月25日 BW781g
- ▼7月26日 BW760g
- ▼7月27日 エサなし
- ▼7月28日 BW744g 尾羽2本、初列1本抜ける
- ▼7月31日 BW761g
- ▼8月 8日 BW780g 今週から一気に羽が抜けるようになった。
- ▼8月 9日 BW769g
- ▼8月10日 エサなし
- ▼8月11日 BW740g 尾羽1本抜ける。
- ▼8月15日 BW755g ヒヨコ1匹のみ（37g）尾羽1本抜ける。7本目。
- ▼8月17日 エサなし 尾羽2本抜ける
- ▼8月18日 BW718g
- ▼8月20日 BW756g
- ▼8月22日 エサ抜き
- ▼8月23日 ヒヨコ2匹
- ▼8月24日 エサなし エサなしを連続や増やすことで絶食に耐えやすくなる？
- ▼8月25日 PMヒヨコ1匹
- ▼8月26日 BW740g 最近はあまり羽が抜けない
- ▼8月28日 BW740g
- ▼8月30日 BW740g しっかりと飛べており息切れも見せない。高さも上がる。
- ▼8月31日 エサなし
- ▼9月 1日 BW725g
- ▼9月 2日 BW740g

- ▼9月 3日 BW738g
- ▼9月 5日 BW753g 雨覆1本抜ける
- ▼9月 7日 BW750g 40m(紐付)10本をなんなく飛ぶ。(ヒヨ3/4匹)
- ▼9月 8日 BW738g 昨日あたりから体羽が多く抜けるようになった
- ▼9月 9日 BW740g 今日だけで大小約50本の抜けた羽根を回収
- ▼9月10日 BW750g 大小30本抜ける(ボソボソ)(BW電子では732g)
ウズラ113g
- ▼9月11日 BW765g 約40本抜ける。ウズラ148g(内臓ごと)
- ▼9月12日 BW798g 約40本(尾羽1本)抜ける。ウズラ、ヒヨ110g(内蔵有)
- ▼9月14日 BW818g 発信機を装着(約12g) エサなし 30本以上
- ▼9月15日 BW760g ウズラ、ヒヨコ 123g 20本ぐらい
- ▼9月16日 BW - g シマヘビ(99g)、ヒヨコ20g
20本ぐらい(うち尾羽1)
- ▼9月17日 BW818g ウズラ135g 10本ぐらい。最後の尾羽も抜ける。
- ▼9月18日 BW835g ウズラ1匹 20本抜ける。
朝の訓練中にクリアンスが切れて逃亡。4mの電柱に乗った後、普通の電柱、屋根上のアンテナと伝い、林にあるカイツカの上で確保ができた。風も強い日だがしっかりと飛距離があるものの、最後はなぜ林の中の高さの低いところに降りたかは不明。鈴の音が強くなったため居場所の検討をつけることができた。鈴が強くなったことには滑って落ちたなど何かしらのアクシデントがあったのか。捕獲できてしまったことに心配は残るものの、飛距離にして200m、高さにして10mは確実に上がることができることを確認できた。あとは現在の翼のバランスで飛翔できるよう自然の中で訓練するしかない。発信機を装着し、この後の生活を追うことは大切に思う。丁寧に監視していきたい。
- ▼9月19日 BW855g ウズラ1匹 130g
- ▼9月20日 BW 放鳥

○換羽について

8月の2週目ぐらいから、一気に羽が抜けるようになった。本来の換羽は渡りの時期に合わせるようにこの季節が本格的な換羽の季節になっている可能性もある。10月頃の渡りを考えると2か月前の8月に換羽が始まることは自然と言えるか。

→2014年9月7日 一気に羽毛が抜けはじめた。ボソボソになって本格的な換羽といえる。

尾羽は中から順番に外に向かってほしい順序よく抜けていく。

今回のノスリについては、新しい尾羽にストレスマークが見られないため、換羽中のエサ状態が十分であったことがうかがえる。

| | | | | | | |
|--------|------------------------------------|--------------------|-------|-------|-------|---|
| ノスリ | 回収期間:2013年12月17日～2014年9月20日(約9ヵ月間) | | | | | |
| 保護時 | 1年目の幼鳥(虹彩の色等から) | | | | | |
| 性別 | ♀(放鳥後事故死亡により解剖) | | | | | |
| | 全枚数 | 右翼 | | 左翼 | | 備考 |
| | | 換羽枚数 | 換羽率 | 換羽枚数 | 換羽率 | |
| 初列 | 10 | 6 | 60.0% | 6 | 60.0% | |
| 次列 | 12 | 4 | 33.3% | 5 | 41.7% | |
| 三列 | 3 | - | - | - | - | 1枚も回収できず |
| 尾羽 | 6 | 5 | 83.3% | 4 | 66.7% | ・本体の尾羽がすべて換羽していることから回収不足と判断できる ・事故後の固体回収時の尾羽は11枚 |
| 尾羽欠損部位 | | T1 (元から無の可能性あり) | | T2,T5 | | |

○継ぎ羽

2014年8月18日(月)に生え換わった尾羽の一本が先から1/3-1/4ぐらいのところで折れた。獣医師が他の羽軸を裂き、上下から挟むようにし、それを瞬間接着剤で固め支える処置を行った。

8月27日(水)

とれていることを確認

周りの尾羽にボンドがついていることを思うと、継ぎ羽をするかどうかはメリットとデメリットをしっかりと考えてやっていくべきである

発信機を装着する場合は、添え木(ほかの尾羽の羽軸)をし、その尾羽に沿うように発信機のアンテナを結ぶと良いかもしれない。

○標識について

標識を利用し追う目的

- ①長期保護をした個体が生きていけるのかの確認
- ②どれだけの怪我の後遺症まで生きることができるのかの確認
- ③調教をした個体の放鳥に問題があるかの確認
- ④長期保護された後の個体の生活の確認
- ⑤問題が発生したときの再捕獲
- ⑥生態調査

滋賀県自然環境保全課に確認(2014年7月14日)

- ・滋賀県には保護時に足環をつけるなどの制度がない。
- ・学術研究申請はあくまでも野生の個体を捕まえるための申請
- ・ウィングタグやフラッグなど標識をつけるための制度はない。
- ・一度捕まった個体に標識をつけるための許可はない。
- ・放した個体を再度捕獲する場合には許可が必要になる。

○ウィングマーカの装着

2014年8月18日(月)

Y先生の指導のもとウィングマーカの装着を行った。

・足環は猛禽の場合は、不向きである。それは、

①ふしよ部まで毛が生えている種が多い

②とまっても木の葉などで見えないことが多い。

③勢いよく獲物をとるなど足を使用することから、繰り返しているうちにすり傷になり得る。

・ウィングマーカは素材が大事で、今回使用する素材は、アメリカのもので長年使っていても全く退色しない。

・大きさは縮小コピーをしてつくる。翼幕の幅をはかり、少しのゆとりがあまるだけの大きさが良い。大きすぎると回ったり、場所が初列側にいってしまうし、小さすぎるとすり傷になる。

・ハヤブサなどフラップの早い種類には向かない。

・装着場所は次列と三列の間ぐらいにある裸域部分。

・飛んでいるときも、停まっているときも見える。

※ウィングマーカはこの形をつくるのに2年かかった。K動物園に依頼し、クマタカに装着、再捕獲を繰り返し、シワのあるところを切り落としたりしながらつくった。



8月27日(水)

左翼にもウィングマーカを装着

8月31日(日)

右翼の翼膜頭側にかさぶた様のものあり。ただし、出血や目に見える傷はないためそのま



○測定

バンダーUさんにより基本測定
おそらく雄と思われるとのこと。

明治時代の測定記録を記載した本を使用。この時代は捕まえたものを測定し、解剖して雄雌を判定したため一番正しいとされるとのこと。

○広報について

個人でノスリを追うことは不可能であるため、バードウォッチャーによる情報を集めるためのシステムが必要になる。

そのためには、標識をつけ、その標識で放した旨または目撃情報を集めている旨を広く知らせる必要がある。

広報する方法として以下のことが考えられる。

- ・ホームページ（水鳥観察センターなど）
- ・野鳥の会の会報
- ・雑誌

○気になる点

2014年6月30日

左の翼が下がっていることがあったが、確かに当初は筋力の低下により、長く飛んだときは下げるイメージがある。

しかし、疲れていないときを観察すると、右翼が上がりすぎていることがわかる。

右翼は大きな裂傷、左翼は炎症がレントゲンにより確認できる。

翼が上がりすぎるということは、烏口骨または小胸筋など翼引き上げのための筋肉の異常があるためか。レントゲンからは骨の異常は見られないため、筋肉の異常によるものか。

リハビリにより、距離が飛べるようになってくることは、筋力の強化はもちろんだが、両翼のバランスの調整ができてきたためではないか。

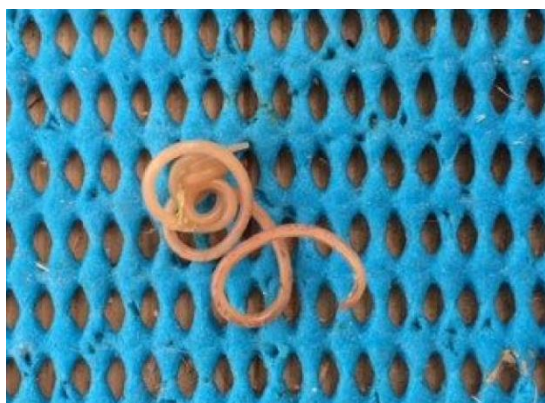
換羽を終えてから、再度距離を飛ばしながらリハビリを重ねていくこととする。

・発信機がノスリの尾羽1本に対しては重く、その付加によってその尾羽の換羽が早まる
ことが予想される。(Y先生)

⇒生存を確認するためだけならば、追跡としては十分である。

○寄生虫

2014年7月21日 糞の中から寄生虫を発見



7月25日 検便からは寄生虫は確認できず

理由はなにか・・・

線虫は確かに生きていたので、ヒヨコの中ではなく、ノスリの糞にいたことは確実である。しかし、ヒヨコの中に卵があり、ノスリの中で孵化をしたと仮定すると、寄生虫の卵は冷凍下でも生きることができ、またヒヨコは初日令で殺処分されるので、親から卵を受けることになる。この2点を調べる必要がある。

○放鳥後の予定

2日に1度の割合で追跡に向かう。

定着場所を確認できた場合、数日に1度、ルアーによりエサを見せる。

フリーフライトにより飛翔能力を向上させてはきたが、せいぜい水平距離にして150m、垂直距離にして5mである。野生個体との飛翔能力とは比べられるものではない。

しかし、放鳥後1～2週間自然の中で風に煽られることにより、ワイルドハックと同じく、短期間で一気に飛翔能力を得ることになることが予想できる。

しかし、その間にエサが取れずに極度の空腹になった場合には、ルアーで呼ぶことにより

エサを食べに帰ってくる可能性がある。

エサを食わした後は再度放鳥し、ソフトリリース形式をとることとする。

自分でエサをとり、生活ができるようになったときにはエサを見せてももどってくることはないと思われる。

一定期間の追跡後、受信できなくなった場合、渡りも視野に入れ、今まで以上に外部へ情報収集の協力依頼をしていく。

衰弱により保護された場合には、一度回収し2週間から3週間かけて体重を100%に戻した上で、再度放鳥するものとする。

○放鳥

放鳥日：2014年9月20日（土）

放鳥時間：午前10時16分

放鳥場所：日爪地区 北部

放鳥方法：軽バンのルーフバーに乗せ、フードをとって自ら飛翔するのを待つ

追跡方法：2班体制で、発信機と目視で追う

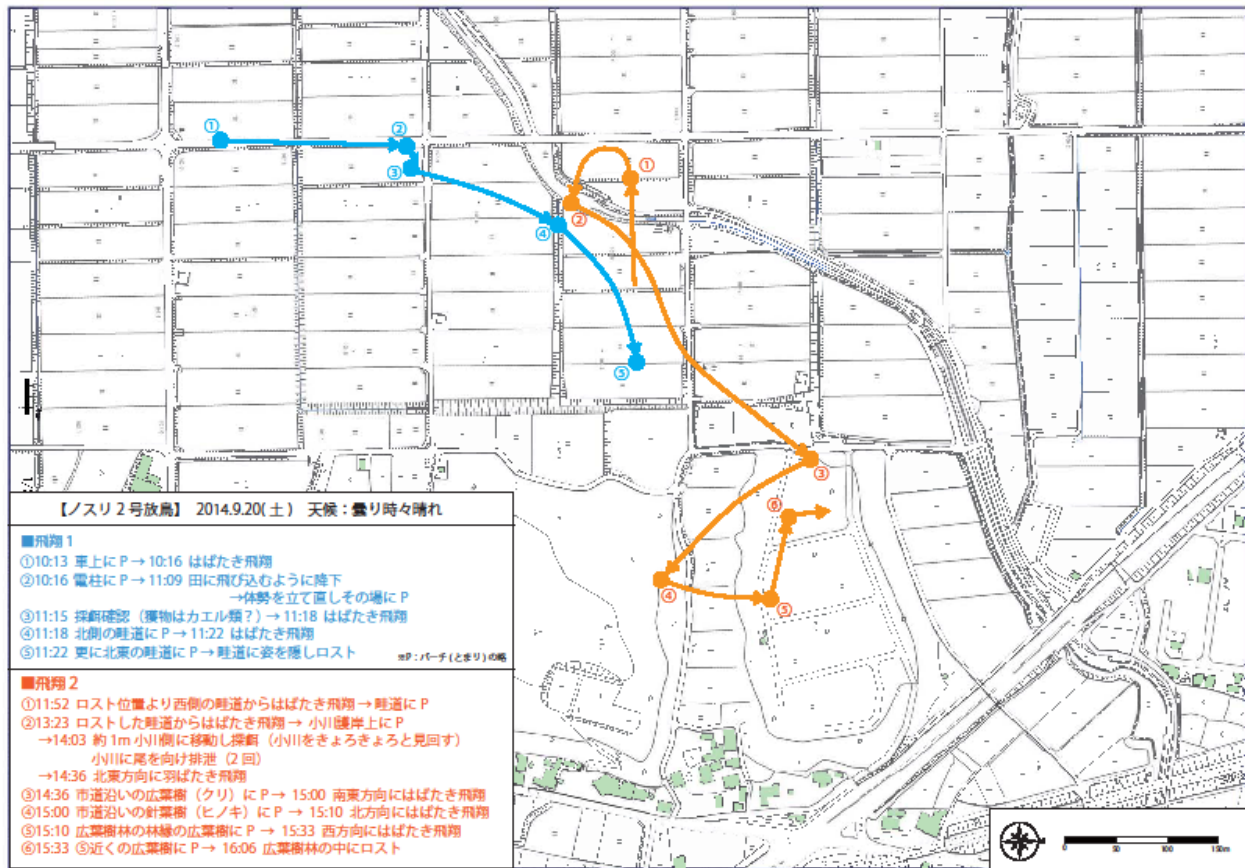
参加者：13名（放鳥時のみも含む）

フライト：

- 1本目：カーブを描いて150m先の電柱のてっぺんにパーチ
- 2本目：1時間後に前の田に向かってダイブ。前のめりにこけたので墜落と思ったが、しばらくしてから、起き上がりカエルと思われるものを食し始めた。先の電柱の上から探餌し、カエルを発見し、ダイブ。
- 3本目：カエルを食べきってから、しばらくしてこちらが近づいたためパーチアウト。田を数枚超えてパーチ。畦の中に入ったため目視はロスト。発信機も拾えず。
- 4本目：しばらくして、観察メンバーが歩いたことにより、パーチアウト。数枚西の田と河川の間で畦にパーチ。再度、ロスト。
- 5本目：河川沿いを数十m飛び、河川の構造物にパーチ。河川の中に糞を二回する、また探餌するなどする。
- 6本目：2回目の糞をしてから、川の中へ向かってパーチ。少し下流から飛翔しながら出てきて、300m以上先のクヌギの高さ3mほどの枝にパーチ。少しして4mほどのところに上がる。
- 7本目：発信をとりていくこちらを警戒し、パーチアウト。同じ林の裏側の広葉樹の高いところにパーチ。高さ10mほど。
- 8本目：林の中の樹冠のてっぺんにパーチ。高さ15mほど。枝は風に揺れ、不安定。
- 9本目：しばらくして、林の中に向かってパーチ。目視ではロスト。ただし、林の向こう側には抜けていないことを観察メンバーが確認。カーアンテナによりビーコンを受信。ただし、八木やスクエアでは拾えず。
- 10本目：林の中で琵琶湖側に飛翔するのを観察メンバーが確認。

- ・11本目：林の中から今度は西側に向かって飛翔するのを観察メンバーが目視。

以降、目視でも受信機でもロスト。



○今回のノスリで学んだこと

- ①追跡には人数が必要(役割分担)
- ②発信機による追跡には十分な野外練習が必要
- ③1年間の飼育した個体が幼鳥であっても、餌を採る行動は忘れない。
- ④調教個体も人間との距離はすぐに離れていく。
- ⑤換羽はほぼ1年間で終了。ただし、換羽の季節以外は、抜いても自己換羽しない。抜いた場所が本当に生えてきたかが微妙。どうも1本足りなかったように思う。
- ⑥両翼が何らかの損傷をし、ほぼ飛ぶことができなかった個体もリハビリに時間をかけると放鳥できるまでになる。

○放鳥後

9月21日 晴 目視、受信ともにできず
9月22日 晴 午後6時30分 受信（垂直）居場所までは確定できず。
9月23日 晴 受信できず。昨日から少なくとも高さは移動している。
電柵の近くでそれを拾うものの周波数関係なく拾うため発覚。
9月24日 雨 受信できず 昼、夜
9月25日 晴 受信できず 昼、夜
9月26日 晴 受信できず 昼、夜
9月27日 晴 受信できず 昼、夜
9月28日 晴 受信できず 夕方
9月29日 晴 受信できず 夕方
9月30日 晴 調査せず

～

10月6日 2日に1回のペースで調査に行くが受信できず
飛べるようになり、遠方まで飛んでしまったのか・・・

～

10月21日 晴 受信できず(今津や新旭でも渡ってきたノスリが見られるようになった)
日爪の放鳥した場所にも一羽目撃

○その後

・目撃情報

2015年1月9日 高島市水鳥観察センター(高島市新旭町)で目撃情報あり。

・再保護

2015年3月6日 昼に、放鳥場所から直線距離にして約6km場所で、ケガをして保護されているとの連絡が入り、急遽病院に回収。放鳥ポスターを見た人が直接動物病院に連絡をくれた。

保護日前日から当日未明に交通事故にあった模様。搬入時には体温も低く虚脱状態。

怪我の状態は右翼上腕骨、骨盤、う口骨の骨折、腹腔内出血。

保温と酸素吸入で対応、眼を開いて少し戻ってきたかに思えた。

皮下補液と負担にならない微量の流動食を与え、回復を待つ骨折の対応を予定していた。



• 死亡

2015年3月6日 17時頃に落鳥

• 解剖および身体の状態

解剖所見より、メスであることを確認。削瘦はほぼ無し。体重は訓練時に近い数値。以上の状況により、しっかりと採餌できており、体力の低下による墜落ではないことが推察される。尾羽に装着した発信機は脱落していた。

| | | | | | |
|----|-------|----|-------|----|--------------|
| 心臓 | 4.00g | 肝臓 | 9.00g | 腎臓 | 5.00g |
| 胆嚢 | 1.55g | 胃 | 7.00g | 膀胱 | 0.85g |
| 脾臓 | 0.25g | 卵巣 | 0.30g | 腸 | 1.20g(88 cm) |

• 羽および換羽の状態

ウイングマーカーによる皮膚や羽への損傷はなく、換羽もされていたため、装着による大きな問題はなかった。尾羽は11枚で欠損箇所はRT1。強制換羽を調べるため、実験的に抜いた尾羽は生えてきていた。換羽シーズンに入り、生えてきたものと考えられる。



◎考察

放鳥後、約5か月半生存していたことが確認され、飛翔・採餌共に問題なく行われていたことがわかった。よって、本個体における治療・リハビリは適切であったといえるだろう。ウイングマーカーによる目撃情報収集は効果的であった。またこのカラーマーキングにより、再保護に至り、詳細な経過を知ることができた。治療・リハビリの効果を確認し技術を向上させるためにはこのような経験の積み重ねが重要であり、追跡調査の必要性が示された一件となった。